

後期中英語北部方言について

—三人称複数代名詞と三人称単数現在動詞語尾を巡って—

松 瀬 憲 司

On the Northern Dialect in Late Middle English: with Special Reference to the Third-person Plural Pronouns and the Verbal Endings in the Present Indicative Third-person Singular

Kenji MATSUSE

(Received October 4, 2004)

Concerning the morphology of the third-person plural pronouns and the verbal endings in the present indicative third-person singular in the present corpus of late Middle English northern dialect, the following points have been clarified:

- (1) Generally speaking, the *th*-form which originated from Old Norse is overwhelmingly dominant over the native *h*-form for the third-person plural pronouns, and the *-(e)s* ending over the *-(e)th* ending for verbs in the present indicative third-person singular.
- (2) The examination of the texts where both *th*-forms and *h*-forms are found has revealed that the selection of the two forms is not necessarily influenced by the phonological criterion that the preceding phonological environment has the right to select either form.
- (3) Alliteration can not be one of the phonological criteria for the selection of *th*-forms and *h*-forms.
- (4) The examination of the texts where both *-(e)s* endings and *-(e)th* endings are found has revealed that the marked *-(e)s* endings occur without exception in the rhyming position in accordance with metrical exigency, whereas the marked *-(e)th* endings can never be seen there.
- (5) In the prose text with almost no metrical restrictions there is no mixture of using the two forms for pronouns and verb-endings respectively.

Key words: Old Norse, phonological criterion, preceding phonological environment, metrical exigency

1 はじめに

中英語 (Middle English; 以下 ME と表記) における三人称複数代名詞に関して, 安藤 (2002:47-48) は (1) のように述べており, また, 三人称単数現在動詞語尾 *-es* の導入に関して, 同じく安藤 (2002:61-62) は, (2) のように指摘している。

- (1) 1200 年ごろから 1500 年ごろの間に古期ノルド語 (Old Norse: ON) から借入した代名詞 *they*, *thier*, *them* が徐々に本来語に取って代わっていった。それは, …, ME の *h*- で始まる語は類似の形式が多くて紛らわしくなったので, もっと弁別的な ON 借用語を使用し始めたためと考えられる。
- (2) 現代英語 (Present-Day English: PDE) の 3 人称単数現在の語尾の *-es* は, ME の北部方言の *-es* の直系である。… Shakespeare には, 同じ行においてさえ, 詩の韻律を整えるために両形が混用されている例が見られる。…¹⁾ 初期近代英語 (Early Modern English: EModE) では, □語調では *-es*, 文語調では *-eth* というふうに使分けられるのが一般的であったと考えられる。 (下線部は筆者)

ところで、Ritt (2003:291-293) は、13世紀の *Ormulum* (『オルムの書』[東中部方言北部地域]) において *hemm* と *þe33m* (=them) の使い分けが見られることを指摘しており、以下の (3) のように、子音で終わる単語 (/jɔ:hən/) には、*hemm* が後続し、母音で終わる単語 (/he:ɪ/) には、*þe33m* が後続するとしている。すなわち、ここでの両者の選択には、明らかに「音韻論的規準」が採用されているという。²

- (3) a. þatt Sannt Johan *hemm* se33de þuss, [=that St. John *them* said thus] —*Orm.*, 10352
 b. þatt he *þe33m* hafeþþ oppnedd [=that he *them* has opened] —*Orm.*, 15447

それを導入することで、当該の言語に欠けている重要な機能を補填したり、これまでは見られなかった有益な状況を生み出すといったことのために、いわば ON から英語へ手渡された「贈り物」として、(1) に見られるような人称代名詞形態の論点 (she と複数形) を中心に松瀬 (2001) では検討したが、本稿では、新たに (2) の動詞の三人称単数現在形語尾の論点も含めて、とりわけ「音韻論的規準」という観点から、ON が最も直接的に影響を及ぼした ME 北部方言の中でそれらを再考してみたい。

以下に、本稿で取り上げる後期中英語資料の、①作品名、②作品の形式[韻文か散文か]、③推定制作年代[古い順に提示]、④分析対象とした分量³⁾ / 総量[行数もしくは頁数]、⑤本稿での略号を示す。

なお、*Cursor Mundi* の Morris 版刊本には、(C)、(F)、(G)、(T) の4つの写本が、また、*Sir Eglamoure of Artois* の Richardson 版刊本には、(L) と (C) の2つの写本が掲載されているので、本稿では、それぞれの写本をも分析の対象にしている。

① *Cursor Mundi* (four MSS.) ed. R. Morris, (EETS, o.s., 57, 1874.) Part I.

- ② Rhymed verse. ③ a1325. ④ 500/4918 lines.
 Cotton Vespasian. A iii., British Museum. ⑤ *Cursor* (C)
 Fairfax MS. 14, Bodleian Library. ⑤ *Cursor* (F)
 Göttingen MS. theol. 107. ⑤ *Cursor* (G)
 MS. R. 3. 8. Trinity College, Cambridge. ⑤ *Cursor* (T)

① *English Prose Treatises of Richard Rolle de Hampole*, ed. G. G. Perry, (EETS, o.s., 20, 1886; rev. 1921.)

- ② Prose. ③ a1349. ④ 7/48 pages. ⑤ *Rolle Rose*

① *Sir Eglamoure of Artois* (two MSS.) ed. F. E. Richardson, (EETS, o.s., 256, 1965.)

- ② Rhymed verse. ③ c1350. ④ 500/1335 lines.
 Lincoln Cathedral Library. 91. ⑤ *Eglam.* (L)
 Cotton Caligula A ii., British Museum. ⑤ *Eglam.* (C)

① *Ywain and Gawain*, eds. A. B. Friedman & N. T. Harrington, (EETS, o.s., 254, 1982.)

- ② Rhymed verse. ③ ?c1350. ④ 500/4032 lines. ⑤ *Ywain*

① *The Wars of Alexander*, eds. H. N. Duggan & Th. Turville-Petre, (EETS, s.s., 10, 1989.)

- ② Alliterative verse. ③ ?a1400. ④ 500/5677 lines. ⑤ *Wars Alex.*

① *Morte Arthure*, ed. E. Brock. (EETS, o.s., 8, 1865; rev. 1871.)

- ② Alliterative verse. ③ ?a1400. ④ 500/4346 lines. ⑤ *Morte Arth.*

2 ME 期方言分布と三人称複数代名詞・三人称現在動詞語尾の形態

古英語 (Old English: OE) 期に存在したノーサンブリア [北部]・マーシア [中部]・ケント [南東部]・ウェセックス [南西部] 4 方言は、ME 期には中部マーシア方言が更に2つに分かれ、北部・西中部・東中部・南部・ケント [南東部] の5方言へと進化した。⁴⁾ 当時は文・口語を通じての標準形が成立する以前の状態であり、いわゆるディクソン (2001:147-148) が言うところの「言語の平衡状態」という、「どの方言も、一時的な、また比較的狭い地域での場合を除けば優勢的地位を得ていない」状態であった。この節では、本題である北部方言コーパスにおける三人称複数代名詞形と三人称単数現在動詞語尾の形態の分析に入る前に、それらを ME 期方言全体から見た図を概観しておく。

Mossé (1952:55-60) によれば、三人称複数代名詞の主格、所有格及び目的格の形態に関して、以下のような表 (4) を作ることができる。⁵⁾ なお、南部方言では、他の方言で進行していた「目的格への統合」は見られず、OE 直系の対格 [accusative] (直接目的格) 形と与格 [dative] (間接目的格) 形を依然として保持していたことが分かる。

(4)	NORTHERN	MIDLANDS ⁶⁾	SOUTHERN DIALECTS
SUBJ.	þai, þay, thai	þei, þeȝ	hy, heo, he, (h)a ⁷⁾
POSS.	þeir(e), þayre, thar	hir(e) (EAST) hür(e) (WEST)	heore, hare, her(e), hire, hör
OBJ.	þaim, thaim, thame,	heom, hem	ACC.: hi, his(e), hes, hies, es DAT.: heom, hem, hōm, ham

[SUBJ.: subjective, POSS.: possessive, OBJ.: objective, ACC.: accusative, & DAT.: dative.]

さらに、Lass (1992:120-121) では、東中部方言は 15 世紀を通じて以下の表 (5) に示す三段階を経て三人称複数代名詞のパラダイムを発達させたとしている。そして、最終的に 16 世紀の初め頃には、they—their—them というパラダイムが確立し、それが EModE 期にその骨格が形作られる標準形にも導入されることで、PDE へと至っているのである。

(5)	PHASE I	PHASE II	PHASE III
SUBJ.	þei	þei	þei
POSS.	her(e)	her(e) ~ þeir	þeir
OBJ.	hem	hem	hem ~ þem

例えば、14 世紀後半に活躍したチョーサーの時代は、上表 (5) の PHASE I に相当することになる。すなわち、主格形のみならずスカンジナビア系形態が現れるパターンである。代表作『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales* [= CT]) から下例 (6) を、Kerkhof (1982²:233) 及び Davis (1979: s. v. *hir(e)/her(e)*) により引用する。

- (6) a. With lokkes crulle as *they* were leyd in presse. — CT (I), 81
 b. *Hire* girdles and *hir* pouches everydeel. — CT (I), 368
 c. That *hem* hath holpen what that *they* were seeke. — CT (I), 18

だが、その一方で、Fisher (1996:61) は、パストン家書簡集において、家族のうちロンドンへ赴き、法廷に出仕した者の文体には、既に 1360 年代から「大法官庁英語 (Chancery English)」への移行が見られるようになり、その中では、*their* や *them* がしばしば散見されるとしている (ノールズ, 1999:65 に言わせれば、「威信と全国的通用と単なる量の点で、王の官僚に匹敵し得るものはなかった」ということになる)。

では、ここで、比較のために、OE における (アングロサクソン系の) 三人称複数代名詞体系 (Lass, 1994:142 & Hogg, 2002:21-22) と、デーン人・ノルウェー人ヴァイキング達が使用していた ON のそれ (Gordon & Taylor, 1957²:294) とを併置させてみる。

(7)	SUBJ.[=nominative]	POSS.[=genitive]	ACC.	DAT.
OE	hi(e)	hi(e)ra/heora	hi(e)	him/heom
ON	þeir/þæ/þau	þeir(r)a	þáþær/þau	þeim

ON の影響が英語に顕著に現れるのは、ME 期以降であると言われるが、上三表より、北部ではスカンジナビア系形態を導入するという革新性が、南部ではむしろ逆にアングロサクソン系を温存するという保守性が、そして、中部ではその両者を折衷させたが如き中庸性が見られることは火を見るよりも明らかであろう (このことが、(2) で述べられている「口語調」と「文語調」という使い分けへの下地になっていると思われる)。もちろんこれには、743 年を実質的な発端とするヴァイキングのイングランド侵攻、そしてその結果としての「デーンロー地

域」(チェスターとロンドンを結ぶ線の北東部地域)の出現が大きく影を落としていることは言うまでもない(松瀬, 2000a 参照)。

次に, Lass (1992:137) は一人称～三人称単数及び複数の現在動詞語尾に関して, 以下の表 (8) を提示している。

(8)	NORTHERN	WEST MID.	EAST MID.	SOUTHERN DIALECTS
Sg. 1st	-(e)	-e	-e	-e
Sg. 2nd	-es	-es(t)	-est	-est
Sg. 3rd	-es	-es/-ep	-es/-ep	-ep
Pl.	-es	-es/-en	-es/-en	-ep

[MID.: MIDLANDS. Sg.: singular, & Pl.: plural.]

本稿では, 北部方言での三人称単数現在を表す動詞語尾の形態にのみ関心があるわけだが, このことに関わる以下のいくつかのことがこの表 (8) より明らかになると思う。

①北部方言では, いわゆる-(e)s 形¹⁾は, 三人称単数現在を表す動詞語尾に限らず, 二人称単数及び複数形にも現れる。これでは, 変化語尾が人称や数のための弁別機能を持つとは言い難い状態であり, その存在意義が問われることになる (-(e)s 形拡大の順序としては, 「二・三人称単数から複数へ」が考えられると Samuels, 1989:111 は指摘している)。

②①と同様のことが起こる可能性は, 西中部方言でも十分に考えられる。

③東中部方言では, 三人称単数と複数形で同一語尾-es 形が現れる可能性がある。

④PDE で, 三人称単数と複数形とを区別するデバイスは, 中部地域における語尾の混交現象にその端緒を求めることができるかも知れない (OE のウエセックス方言では, 三人称単数に -ep 形, 複数に -ap 形があったことを考慮すると, ME 期に生じ得た両者の合一の後, 再び分離して現在に至っていることになる。ただし, McIntosh, 1989a:118 は, 南部方言での -ep 形は, -ap 形から派生したのではなく, 北部方言でのパラダイムに倣った, 三人称単数の -ep 形からの拡大用法であるとしている)。

ちなみに, 東中部方言に属するチョーサーでは, 次のような分布を示している (Davis, 1979:s.v. *like*(n & Kerkhof, 1982²:4)。ここでは, 明らかに, 現在時制の三人称単数形 (-(e)th 形) と複数形 (-(e)n 形) とは区別されている (上記③の状況は見られない)。なお, (9a) は *liken* の非人称用法に DAT. の *yow* が生起している例である。

- (9) a. And if yow *liketh* alle by oon assent — CT (I), 777
 b. And smale foweles *maken* melofye. — CT (I), 9

しかし, 同じ東中部方言でも, Wright (2001:88) によれば, 14 世紀後半のイースト・アングリア地方ノーフォークにおける, ギルドの証書をロンドンのそれとを比較した時, 前者では, -(e)th 形が 24% に対し, -(e)s 形は 11% なのだが, 後者では, -(e)th 形が 41% に対し, -(e)s 形は 0.5%, という結果が出ているように, 同一方言内でも北部地域と南部地域では, 両形態の分布にかなり差異が生じていることがよく分かる。

以下 3・4 節では, 前述した 10 種のテキストにおいて, 三人称複数代名詞形態及び三人称単数現在動詞語尾形態の標本調査を行った結果に基づき議論を進める。なお, 韻文資料に関しては, 始めの 500 行を, 散文の場合は, (韻文の 500 行に相当し得る) 全体の 1/8 ~ 1/10 の分量を調査対象とした。

3 三人称複数代名詞 th- 形 vs. h- 形

今回のコーパスにおける三人称複数代名詞形態 (th- 形・h- 形) の分布に関して, まず, 次の (10) のような結果を得た。

(10)		TH-形			H-形			TOTAL ⁹⁾
		SUBJ.	POSS.	OBJ.	SUBJ.	POSS.	OBJ.	
RVerse	<i>Cursor</i> (C)	21(46%)	11(24%)	13(28%)	0(0%)	0(0%)	1(2%)	46(100%)
	<i>Cursor</i> (F)	19(42%)	12(27%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	14(31%)	45(100%)
	<i>Cursor</i> (G)	18(40%)	10(22%)	14(31%)	0(0%)	3(7%)	0(0%)	45(100%)
	<i>Cursor</i> (T)	13(36%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	12(33%)	11(31%)	36(100%)
	<i>Eglam.</i> (L)	14(56%)	1(4%)	10(40%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	25(100%)
	<i>Eglam.</i> (C)	10(53%)	0(0%)	3(16%)	0(0%)	0(0%)	6(32%)	19(100%)
	<i>Ywain</i>	25(61%)	6(15%)	10(24%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	41(100%)
AVerse	<i>Wars Alex.</i>	23(36%)	25(39%)	16(25%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	64(100%)
	<i>Morte Arth.</i>	35(47%)	18(24%)	22(29%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	75(100%)
Prose	<i>Rolle Rrose</i>	12(50%)	5(21%)	7(29%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	24(100%)

[RVerse: Rhymed Verse & AVerse: Alliterative Verse]

一見して、今回のコーパスでは、*Cursor* や *Eglam.* といった、複数の写本が並置されているテキストの場合、写本間で多少の異同が観察されるが、単一写本を底本としたテキスト (*Ywain*, *Wars Alex.*, *Morte Arth.*, & *Rolle Rrose*)¹⁰⁾ の場合は、どれもはっきりと北部方言の様相を呈していることが分かる。まずは、後者の具体例を、変異形も含めて今回発見された形態を全て、主格形・所有格形・目的格形の順で、(11)~(13) に提示しておこう。

- (11) a. Bot sone, when *þai* war went to slepe, — *Ywain*, 53
 b. For *þai* can swyth of a sweuyn all *þe* swepe tell, — *Wars Alex.*, 248
 c. *They* enclined to the kyng.and counge *thay* askede, — *Morte Arth.*, 479
 d. *Thei* couerde the Capitoile,and keste doune the walles; — *Morte Arth.*, 280
 e. and *þai* fynd it in Ihesu. — *Rolle Rrose*, 4/25
 f. For *thay* lyfede noghte *þe* name of Ihesu. — *Rolle Rrose*, 4/14-15
- (12) a. *Þaire* light lasted over al *þe* land. — *Ywain*, 364
 b. Sekand *þaire* souerayn withmany salt terys. — *Wars Alex.*, 154
 c. To ryde one zone Romaynes and ryott *theire* landez. — *Morte Arth.*, 341
 d. Aftyre *theyre* werthe they wesche.and went vn-yo chambyre, — *Morte Arth.*, 231
 e. *þat* has chosen *þe* name of Ihesu to *thaire* specyalle, — *Rolle Rrose*, 5/19-20
 f. and so *þaire* desyre duse noghte awaye *þaire* fillynge. — *Rolle Rrose*, 4/ 3- 4
- (13) a. Bot I *þat* durst omang *þam* ga. — *Ywain*, 308
 b. Reft him vp be *þe* otis & radly *þam* stampis. — *Wars Alex.*, 409
 c. Bot gefe *þaim* vp *þe* girdill.vs gaynes noȝt ellis. — *Wars Alex.*, 181
 d. In pris appairelles *theme* in precious wedez; — *Morte Arth.*, 500
 e. if I lefede *tham*, — *Rolle Rrose*, 7/ 7
 f. trowande *þam* to loye with Criste, — *Rolle Rrose*, 4/13
 g. ȝitt hungres *thayme*; — *Rolle Rrose*, 3/29
 h. he schewede *theym* to *þe* Abolte, — *Rolle Rrose*, 7/26

上記の例の大半については、取り立ててコメントすべきところはないが、その目的格の変異形が4種類にも上っている ((13e) ~ (13h)) など、変異形が最も多く現れるテキストは、散文の *Rolle Rrose* であったことは指摘しておいていいだろう。また、通常、「*tha-* 形」が現れるか、または「*the-* 形」が採用されるかは、テキストによってほぼ統一されているように見えるが、*Rolle Rrose* と *Morte Arth.* では、両者ともが出現している。ただし、前者では、*tha-* 形が無標で、*the-* 形が有標であるのに対し ((13h) 参照)、後者では、その逆となっている点が非常に興味深い ((11c) の後半部参照。なお、McIntosh, 1989b:184. n9 も *Morte Arth.* におけるこの傾向について

言及している)。

さらに、(13b) の *þam* に関しては、Duggan & Turville-Peter (1989:xxxix) に実に興味深い指摘がある。これは、オリジナルの詩人の方言では、「複数形の *him*」として書かれていたらしい。つまり、写字生がそれを単数形の *him* と取り違えていたとして、刊本制作者の Skeat が *þam* と校訂したのが 409 行なのである (Duggan & Turville-Peter の刊本は、この Skeat 版を底本としている)。実は、*Wars Alex.* には、この他にも複数形の *him* であろうと考えられる箇所が 9 箇所発見されるようで、これらは全て写字生が単数形の *him* と取り違えていたものであるらしく、だとすれば、むしろオリジナルの詩人の方言では、目的格は *hem* や *hom* ではなく、*him* であった可能性が高くなる、という主張である。オリジナルは明らかに北部方言であると考えられるのに、三人称代名詞の目的格形に関しては、単数形からそれを区別するための *hem* ですらなく、単複同形の OE 期からの *him* が使用されていたとすれば、これは *Wars Alex.* の言語における非常に特異な点であると言っていい。

また、*Wars Alex.* と *Morte Arth.* は頭韻詩であるにも関わらず、そこには *th-* 形のみしか発見されないということは、「頭韻 (alliteration)」という「韻律上の要請 (metrical exigency)」に対して、(おそらく、それだけの利用価値は十分にあったはずだが) *h-* 形は何ら寄与しなかったことを証明している。したがって、頭韻という音韻論的規準は、両形態選択の際には全く働かなかったと言えよう。

では、問題の脚韻詩 *Cursor* と *Eglam.* についてであるが、まず、*Cursor* (T) は、下例 (14) のように、主格に *th-* 形が生起し、所有格および目的格形には *h-* 形が現れるという、明らかに中部方言の特徴を示していることが分かる。このことに関して、Hupe (1962:135) は、その音韻の特徴が中部地方の南西部に見られるものであることを示唆している (cf. 下例 (19c))。

(14) *her peyne þei bere on hem ay*

—*Cursor* (T), 497

次に、*Cursor* (F) は、所有格形が *th-* 形であることから、これは北部方言であると見られるが、目的格形は例外なく *h-* 形であることが特異な点である。Hupe (1962:133) によれば、これは、ランカシャー地域での方言の特徴であり、ヨークの古い司教管区の西部地域で作成された写本ではないかと推測されている。

ここで、先に Ritt (2003²) が指摘した、*h-* 形が生起する音韻論的基準を調べてみたところ、下例 (15a) のように子音で終わる語が先行する例が 11 例発見されたのに対して、他方、母音で終わる語が先行する (15b) のような例は 2 例であり、目的格形そのもので行が始まる (15c) の例が 1 例であった。確かに、子音で終わる語が先行する割合は約 85% という高率に達するけれども、今回のような標本調査コーパスからは、これのみを以て音韻論的基準によって *h-* 形が選択されたのだとは言い難い。それよりもむしろ、逆に、子音で終わる語が先行する環境以外で *h-* 形が使用されているという事実を考えると、この *Cursor* (F) の写字生の方言では、*h-* 形が無標であるということができらるだろう。

(15) a. and clanset þat court of ham so clene

—*Cursor* (F), 475

b. to teyche *ham* to be war and wyse.

—*Cursor* (F), 254

c. *ham* likes now na oþer gle.

—*Cursor* (F), 54

では、その目的格形に両形態の混交が見られる *Cursor* (C) の場合を見てみよう。そこで唯一発見された *h-* 形の例を (16) に挙げる。

(16) *þe hali gost comms of hem tua*

—*Cursor* (C), 308

ここでは、音韻論的基準としての、子音で終わる語が先行するという環境は、確かに見受けられるが、*th-* 形が同じく子音で終わる語に続く例は 9 例もあるのに対し (下例 (17b) など)、むしろその生起環境として考えられる、母音で先行する場合は、もっと少なく僅か 4 例にすぎない (下例 (17a) など)。なお、先行する語が現れない例としては、(17c) が唯一の例である (cf. 上例 (15c))。

(17) a. And schurd þat curt o þam sa clene.

—*Cursor* (C), 475

b. þar-for do draw *þam* hider-wars

—*Cursor* (C), 261

c. *þam* likes now nan oþer gle;

—*Cursor* (C), 54

ここで、(16) と (17a) を比較する限り、th- 形と h- 形の交代は直前の語が子音で終わるか、母音で終わるかに依拠しているようにも見えるが、先行する語がない場合 (上例 (17c)) は、th- 形が用いられていることから、th- 形が無標であることははっきりしている。したがって、このケースを音韻論的基準のみで説明することはできないようである。

次に、*Cursor* (G) を見てみる。ここでは、所有格形において、h- 形が 3 例見いだされた。

(18) a. Pere many thousand lesis *hir* lijf,

—*Cursor* (G), 6

b. Aboute þe nedis of *hir* inne;

—*Cursor* (G), 192

c. Ful wa til þaim *hir* loue to spende

—*Cursor* (G), 257

上例 (18) で、h- 形が生起する環境はすべて直前の語が子音で終わっている点は確かに認められるが、他方、th- 形が生起する環境に目を転じてみると、

(19) a. Pat in þaim selff *þair* sedis bare.

—*Cursor* (G), 386

b. Pat þai *þair* mede may wid amende,

—*Cursor* (G), 256

c. *Þair* þinc þai bere apon þaim ay.

—*Cursor* (G), 497

(19a) のような、(18) で h- 形が生起するのと同じ環境が 8 例。逆に、(19b) での母音で終わる語に th- 形が続く例は僅かに 2 例発見されるのみで、(19c) は、直前に語が先行しない唯一の例である。したがって、この分布結果を見る限り、(18) における h- 形の採用もまた、音韻論的基準のみによってなされているとは、どうも言い難いようである。

最後に、*Eglam*, (C) における、目的格形での th- 形と h- 形の混交を見てみることにする。

(20) a. So sore bufletlys he *hem* gaue

—*Eglam*, (C), 47

b. Grete hertys walken *hem* amonge,

—*Eglam*, (C), 236

c. And wondes *þem* wondur sore.

—*Eglam*, (C), 354

この *Eglam*, (C) では、両者の分布は、th- 形 3 例に対し、h- 形が 6 例であること、さらに、th- 形は (20c) のように、先行する語が子音で終わるもののみと共起しているが、h- 形は (20a) および (20b) から分かるように、先行する語は子音・母音の両方で終わっていることから、h- 形の方が無標である可能性が高い。ただし、その有標形の th- 形の生起環境は、前出の *Cursor* (C) や *Cursor* (G) の場合とは違って、3 例とも先行する語が子音で終わるといふ特異性を持っている。つまり、このケースには音韻論的基準は全く当てはまらないことになる。

以上、今回のコーパスで、三人称複数代名詞形態において th- 形と h- 形の混交が見られた脚韻詩 *Cursor* (C)、*Cursor* (G)、*Eglam*, (C) を検討してきたが、Ritt が提唱するような代名詞形態選択に関わる、当該代名詞に直前先行する語が子音で終わるか、母音で終わるかという音韻論的基準は、それほど強力な制約とはなり得ないことが判明した。特に、*Eglam*, (C) の場合などは、Ritt の指摘とは逆の現象が観察されている。また、頭韻詩では、混交そのものが見られないことから、頭韻は両者選択の音韻論的規準たり得なかったと言える。

4 三人称単数現在動詞語尾 -(e)s 形 vs. -(e)th 形

今回の調査では、三人称単数現在動詞語尾形態 (-(e)s 形・-(e)th 形・- ϕ 形 [ゼロ語尾形]) の分布については、次の (21) のような結果を得た (後ほど議論するが、-(e)s 形の数値には、その変異形の数値もカウントされている)。

(21)		-(E)S形	-(E)TH形	- ϕ 形	TOTAL
RVerse	<i>Cursor</i> (C)	48(100%)	0(0%)	0(0%)	48(100%)
	<i>Cursor</i> (F)	40(95%)	0(0%)	2(5%)	42(100%)
	<i>Cursor</i> (G)	44(98%)	0(0%)	1(2%)	45(100%)
	<i>Cursor</i> (T)	3(7%)	38(93%)	0(0%)	41(100%)
	<i>Eglam.</i> (L)	46(100%)	0(0%)	0(0%)	46(100%)
	<i>Eglam.</i> (C)	38(88%)	5(12%)	0(0%)	43(100%)
	<i>Ywain</i>	10(100%)	0(0%)	0(0%) ¹¹	10(100%)
AVerse	<i>Wars Alex.</i>	126(100%)	0(0%)	0(0%)	126(100%)
	<i>Morte Arth.</i>	85(100%)	0(0%)	0(0%)	85(100%)
Prose	<i>Rolle Rrose</i>	67(99%)	0(0%)	1(1%) ¹²	68(100%)

まずはじめに、- ϕ 形 [ゼロ語尾形] についてコメントしておく。下例の (22b) の come は、他の写本との比較からも、接続法での形態とは考えられない。これは明らかに-(e)s 形の代わりに - ϕ 形としか言いようがないであろう。

- (22) a. þe hali gost *comms* of hem tua. (=16) — *Cursor* (C), 308
 b. þe haly gaste come of ham twa. — *Cursor* (F), 308
 c. þe hali gast *comes* of þaim to. — *Cursor* (G), 308
 d. þe holy goost *comeþ* of hem two. — *Cursor* (T), 308

また、(23a) の awe や (23b) の au も、直説法で過去形態を現在形として使用している (23a) や現在形そのものの (23d) との比較より、- ϕ 形であると考えられるし、(24c) に観察されるような 6161 行の owes という形態の存在からも (Morris, 1892: s.v. *owes*)、- ϕ 形と考えてよいのではなかろうか。

- (23) a. For godd aght noght gif þam mercy — *Cursor* (C), 485
 b. for god awe nojt to gif mercy. — *Cursor* (F), 485
 c. For god au noght giue him mercy. — *Cursor* (G), 485
 d. For god *oweþ* not ʒif him mercy — *Cursor* (T), 485
- (24) a. þis night aght to be euer in mind — *Cursor* (C), 6161
 b. þis niʒt aʒt to be in Min — *Cursor* (F), 6161
 c. þis *owes* euer to be in mind — *Cursor* (G), 6161
 d. þis *oweþ* euer to be in mynde — *Cursor* (T), 6161

さらに、次の (25) の - ϕ 形 *rauesche* も、別の写本では-(e)s 形である *rauysches* が現れていると Perry (1866:2n) は指摘している。

- (25) what thyngþe þat it trewely *towches*, it rauesche it vtterly to it. — *Rolle Rrose*, 2/25-26

したがって、今回発見された上記 - ϕ 形は、-(e)s 形を無標とするテキストにのみ現れていることも考え合わせると、-(e)s 形の変異形として処理できるかと思う。¹³

それでは、本来の-(e)s形対-(e)th形という視点で改めて上表 (21) を見てみるとどうであろうか。それは、一般的に3節で検討した三人称複数代名詞形における th- 形対 h- 形の分布がそのまま当てはまると言っている。すなわち、*Ywain*, *Wars Alex.*, *Morte Arth.*, & *Rolle Rrose* では、明らかに北方方言の特徴が見て取れるが、*Cursor* と *Eglam.* では、写本によっては、中部方言の様相を垣間見ることができるものも存在するということである。その典型例は、*Cursor* (T) であろう。ここでは、その9割以上を-(e)th形が占めている。例えば、

- (26) a. *þat in oure nede dop vs socoure* — *Cursor* (T), 70
 b. *Al holdep he vp fro doun fal* — *Cursor* (T), 280
 c. *þer ynnc fuyr hap his stalle* — *Cursor* (T), 396

(26a) の *dop* は、その他の写本では、(C) (F) (G) の順に、*dos*, *dose* (この *-se* 形については、後で取り上げる)、*dos* であり、(26b) の *holdep* は、*haldes*, *haldes*, *haldis* であった。そして、(26c) の *hap* の場合は、すべて *has* である。このように、他の写本では全て、*-(e)s* 形が無標であるという事実に対し、*Cursor* (T) では、*-(e)th* 形が無標なのである。

では次に、*Cursor* (T) における有標の *-(e)s* 形 3 例を見てみよう。

- (27) a. *Of good pire com gode perus*
Werse tre wers fruyt berus — *Cursor* (T), 37-38
 b. *þis fruyt bitokenep alle oure dedes*
Boþe gode & euel who so riȝte redes — *Cursor* (T), 41-42
 c. *He dalt hem ful in sex dayes*
In parties as þe scripture sayes — *Cursor* (T), 351-352

(27a) ~ (27c) のいずれの場合も、有標の *-(e)s* 形は明らかに脚韻の位置に生じていることが分かる。すなわち、*Cursor* (T) では、脚韻を構成するという「韻律上の要請」によって *-(e)s* 形が現れていると言える。そして、さらに付け加えるならば、(26a) ~ (26c) にその一部を提示したが、無標の *-(e)th* 形は決して脚韻の位置に現れることはなく、また、*-(e)s* 形が無標であるその他の写本においても、*-(e)s* 形が脚韻の位置に現れる例は、今回のコーパスでは一例もないのである。

今度は逆に、*-(e)s* 形が無標である *Eglam.* (C) において、有標の *-(e)th* 形 5 例は、どのような振る舞いをしているのであろうか。

- (28) a. *Syr. a mon þat hewyth ouyr hye* — *Eglam.* (C), 70
 b. *He hath serued vs many a day,* — *Eglam.* (C), 126
 c. *The knyȝt kepeth no more blys* — *Eglam.* (C), 169
 d. *That in my londe lyueth now,* — *Eglam.* (C), 212
 e. *That he hath sleyn syxte on a day,* — *Eglam.* (C), 294

なお、Richardson (1965:xxx) によれば、北ヨークシャーで作成されたと思われる *Eglam.* (L) において、(28a) ~ (28e) の *-(e)th* 形それぞれに対する形態は、もちろん *-(e)s* 形であり、順に *hewes*, *hase*, *kepis*, *lyues*, *hase* である。この結果からは、したがって、*Cursor* (T) で見られたような、脚韻を構成するためのデバイスとして *-(e)th* 形が機能しているとは言い難い。⁴¹

さて、前述した *-(e)th* 形、*dop* に対する *-(e)s* 形には、*dos* だけでなく、その変異形と考えられる *-se* 形の *dose* も少なからず発見されている。この *-se* 形の分布としては、*Cursor* (F) に 1 例、*Eglam.* (L) に 15 例、*Ywain* に 2 例、*Wars Alex.* に 2 例、*Morte Arth.* に 1 例、そして *Rolle Rrose* に 4 例というものであったが、*Cursor* (C), *Cursor* (G), *Cursor* (T), *Eglam.* (C) では皆無であった。具体例を挙げる。

- (29) a. *quen I. haue nede me dose socour* (“does,” cf. (26a)) — *Cursor* (F), 70
 b. *’Gramercy, sir, sayse he* (“says”) — *Eglam.* (L), 96
 c. *Sir Eglamour tase þe waye* (“takes”) — *Eglam.* (L), 197
 d. *By þe eres into þe hert it gase* (“goes”) — *Ywain*, 146
 e. *Quat dose now þis diuinour bot to desert wendis,* (“does”) — *Wars Alex.*, 406
 f. *Now wakkenyse the were ! wyrchipide be Cryste !* (“wakens”) — *Morte Arth.*, 257
 g. *þat þaire fillynge duse noghte awaye þaire desire,* (“does”) — *Rolle Rrose*, 4/3-4

上記以外の動詞としては, *hase* “has” (*Eglam.* (L), 298), *ouirtase* “overtakes” (*Eglam.* (L), 352), *slase* “slays” (*Eglam.* (L), 353) を挙げることができる。¹⁵⁾

さらに、これは *Morte Arth.* に限られるのだが、また別の変異形である *-(e)z* 形を見ることができる。上表 (21) の *-(e)s* 形 85 例のうち、10 例がこの *-(e)z* 形であった (12%)。

- (30) a. *Saluz the as sugett, vndyre his sele ryche;* — *Morte Arth.*, 87
 b. *Syre Ewane fyrt Vryenee thane egarly fraynez,* — *Morte Arth.*, 337

以上の議論をまとめると次のようになろうかと思う。すなわち、今回のコーパスでは、予想通り全般的に北部方言形態である *-(e)s* 形が圧倒的な優位を示していると言っている。その中でも、両形態が発見されるテキストを調べてみると、*-(e)th* 形が無標であるテキスト (*Cursor* (T)) においては、有標の *-(e)s* 形は明らかに脚韻の位置に生じており、これらは韻律上の要請により採用されたと思われる。ところが一方で、*-(e)s* 形が無標であるテキスト (*Eglam.* (C)) においては、有標の *-(e)th* 形は脚韻とは無関係な位置に生じている。このことについては、改めて全 1377 行を調査したが、脚韻の位置の *-(e)th* 形は皆無であった。これは、文体的及び意味的な要請とも考えられなくはないが、少なくとも音声的な制約で説明することはできないようである。確かに、前出のシェイクスピアにおいて観察される両形態の混交は、明らかに韻律上の要請からであろうが、それは両形態が依然として競合状態にある東中部方言地域ならではの現象であり、北部方言では、ME 期のうちにほとんどその勝負がついてしまっていたと言えるだろう。

5 ま と め

本稿では、今回行った、韻文と散文による北部方言コーパスにおける三人称複数代名詞と三人称単数現在動詞語尾の形態の分析から、次のことを明らかにした。

- ① 全般的に、三人称複数代名詞形態としては、OE 起源の *h-* 形ではなく、ON 起源の *th-* 形が、主格・所有格・目的格の全てにおいて主流であり、三人称単数現在動詞語尾形態に関しては、OE 起源の *-(e)th* 形ではなく、ON 起源の *-(e)s* 形が主流であった。
- ② *h-* 形と *th-* 形の両者が混在するテキストを分析した結果、その直前の音声的環境が両形態の選択に大きく関与するといった、音韻論的規準のみで両者の生起状況を判断することはできない。
- ③ 頭韻は *h-* 形・*th-* 形選択に関わる音韻論的規準とは言えない。
- ④ *-(e)th* 形と *-(e)s* 形の両者が混在するテキストを分析した結果、*-(e)s* 形が有標の場合は、それらは脚韻の位置に生起しており、韻律上の要請が音韻論的規準として働いていることが確認されたが、有標の *-(e)th* 形は脚韻の位置に生起していないので、この規準は当てはまらない。
- ⑤ 韻律上の様々な制約がほとんどない散文のテキストでは、代名詞・動詞語尾における両形態の混交は全く見られなかった。

今回、Ritt の提唱する音韻論的規準が形態選択に高い妥当性を以て機能しなかった理由の一つは、おそらく、13 世紀と 14 世紀という時間的なズレに求められるのかも知れない。北から南へ ON 起源のアイテムが燎原の火のように拡大していくこの時期、1 世紀のタイムラグはかなり大きいと考えなければならない。つまり、14 世紀北部地域では、ON 起源形が既に大きなトレンドになってしまっていたということであり、そのトレンドは、特に韻文作成時に重宝するような、各種の音声的・韻律的環境に対応できるデバイス (OE 起源のアイテム) が韻文で使用される状況さえ押し流してしまう程のメガ・トレンドだったのである。

註

- 1) 安藤 (2002) には、次の『ヴェニスの商人』4幕1場187行の以下の部分が引用されている。

(i) It *blesseth* him that gives and him that takes:

- 2) Mustanoja(1960:134) は次のように言う。"In *Ormulum* the only form for the nominative is *þe33* (*te33*); the majority form for the possessive is *þe33re* and the minority for the accusative and dative *þe33m*."

また、このような音韻論的規準は、他の形態選択の際にも働くことが、Wolfram (1991:235) で指摘されている。すなわち、現代米語のアパラチア山脈地域変種にしばしば見られる、*a-ing* 形 (*a-beggin'* や *a-wantin'* など) は、①第一音節に強勢がある動詞の *-ing* 形と共起する、②子音で始まる動詞の *-ing* 形と共起する、③子音で終わる語の後に生じしやすい、などである。

- 3) 松瀬 (1999:181) は、標本調査では非常に希なケースの存在を見逃す可能性を指摘し、限定されたコーパスを利用した研究の危うさを戒めたが、一方でコーパス言語学的手法の正当性もまた認められるところでもあることから、本稿では後者の手法に則り分析を展開する。なお、散文資料の分量は、後から述べるように、韻文資料とのバランスを考えて決定している。

- 4) 確かに、OE 期に4方言を同定することはできるのだが、"Over much of England in the tenth and eleventh centuries there is likely to have been considerable linguistic diversity, especially in the north-west where many of Scandinavian settlers were descendants of a generation which had lived in Ireland" と Blair (2003²:305) が言うように。例えば、OE 期後期に標準文語 OE・アングリア方言だけでなく、それに ON・ケルト語まで混在した状況があり得たし、また、ME 期においても、Mossé (1952:3) が指摘するように、"It is impossible to insist too strongly on the approximate and provisional character of these areas, which have only an indicative value" ということは銘記しておくべきである。結局、"... the use of labels such as 'language', 'dialect', and 'variety' does not imply that continua are not involved" ということであろう (Chambers & Trudgill, 1998²:12)。

- 5) 中尾 (1972:137) では、13世紀の西中部方言に、*he* (非強勢形 *ha*) が見られるとしている。

- 6) ただし、所有格形については、前出の『オルムの書』では、東中部方言の北部地域であることから、*hir(e)* 形ではなくむしろ *þe33re* 形が発見される。また、Burrow & Turville-Peter (1992:27) は、西中部方言で書かれた Gawain 詩人の作品群では、*hor/her* 形だけでなく、*þe33r* 形も見られることを指摘しているし、Wright (2001:93) は、東中部方言に属するノーフォークとロンドンのギルドの証書中に、「目的格の *he*」をも発見している (cf. 下註7))。

- 7) 今回調査した北部方言コーパスにも代名詞 *a* が発見された。ただし、この場合、複数ではなく、415行の *þe sqwyere* と前方照応関係にある単数の *he* であった。

(ii) Till a clyffe þe sqwyere com sonc:

A sees a knyghte heward hym one,

— *Eglam.* (L), 415-416

南部方言では、(h)a だけでなく、単数主格代名詞形 *he* そのものが「複数主格形」としても使用されており、前出の安藤 (2002:47-48) が指摘するような弁別しにくさという点では、まさに混乱の極みにあったとも思われるが、そういう状態が存続したという事実は、北部方言における ON 形といった、それに代わるデバイスが南部方言には、なかったことを示している。

- 8) 中尾 (1972:159) は、この *-(e)s* 形の起源として、音韻変化説・置換説・類推説・ON 影響説を挙げているが、R 音への転換との関連については、松瀬 (2000b) を参照。

- 9) 写本間に細かな表現上の異同があるため、標本総数は一致していない。例えば、

(iii) a. Man *yhemes* rimes for to here,

— *Cursor* (C), 1

b. Men *couettes* rimes for to here

— *Cursor* (F), 1

c. Men *3ernis* iestis for to here.

— *Cursor* (G), 1

d. Men *3emen* iestes for to here

— *Cursor* (T), 1

- 10) それぞれの刊本の底本となった写本は次の通りである。

(iv) *Ywain*: Cotton Galba. E., ix, British Museum

Wars Alex.: MS Ashmole, 44, Bodleian Library

Morte Arth.: Thornton MS., Library of Lincoln Cathedral

Rolle *Rrose*: Thornton MS., Library of Lincoln Cathedral

- 11) 以下の (v) には、本稿で言う $-\phi$ 形が現れており、Friedman & Harrington (1982:xlvi) も、三人称単数現在動詞語尾として「 $-\phi$ 形」を認めているが、この場合はやはり、物語を始める定型句としての祈願文における接続法用法と考える方が妥当であろう。

(v) Almyghti God þat made mankyne,
He *schilde* his servandes out of syn
And *mayntene* þam with might and mayne. — *Yvain*, 1-3

- 12) 次の例の *see* は、やはり接続法と見るべきであろう。

(vi) The wykkyde sall be don a-waye. þat he *see* noghte þe loye of God — Rolle *Rrose*, 4/23-24

- 13) Trudgill (2001) は、PDE のイースト・アングリア方言（イングランド中東部地域）に見られる三人称単数現在動詞語尾 $-\phi$ 形の起源について考察しているのだが、それには次の二通りのシナリオが考えられるという。

(vii) a. $-\text{eth} > -\text{es} > -\phi$
b. $-\text{eth} > -\phi$

(viiia) は、北部方言から流入した $-(e)s$ 形から、語尾を落とすことで $-\phi$ 形が生じたとするものであり、(viiib) は、中間形態の $-(e)s$ 形を経ずして、 $-\phi$ 形が現れたと考えるものである。Trudgill の結論としては (viiib) であり、そこには、外国人の流入と言語接触による、より自然な形態を採用するという傾向が関わっている。今回発見された $-\phi$ 形に関しては、規模の点から見てもごく例外的な現象であり、Trudgill の説明は当てはまらない。

- 14) *Eglam* (C) は脚韻詩であり、頭韻詩ではないが、(28c) や (28d) を見ると、*knyst kepeth* や *londe lyueth* にはその技法が感じられることは確かであろう。しかし、だとしても、それらが $-(e)th$ 形である必然性は全くなく、 $-(e)s$ 形でも何ら問題はないので、頭韻との連関も否定されうる。
- 15) この $-\text{se}$ 形の採用は、Cable (2002:121) で主張されている、頭韻詩韻律において弱音節をカウントする原則の重要性と絡むものかも知れない。

参考文献

- 安藤貞雄. 2002. 【英語史入門—現代英文法のルーツを探る—】 東京：開拓社。
- Blair, Peter H. 2003. *An Introduction to Anglo-Saxon England*. 3rd edition. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Blake, Norman, ed. 1992. *The Cambridge History of the English Language*. Vol. 2. 1066-1476. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Brock, E. ed. 1865; rev. 1871. *Morte Arthure*. (EETS, o.s., 8.) London: Oxford Univ. Press.
- Burrow, J. A. & Thorlac Turville-Petre. 1992. *A Book of Middle English*. Oxford: Blackwell.
- Cable, Thomas. 2002. "Fifteenth Century Rhythmical Changes." In Iyeiri & Connolly, eds., 109-125.
- Chambers, J. K. & Peter Trudgill. 1998. *Dialectology*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Davis, Norman et al. 1979. *A Chaucer Glossary*. Oxford: Clarendon Press.
- Dixon, R. M. W. 1997. *The Rise and Fall of Languages*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
(= デイクソン, R.M.W. 著. 大角翠訳. 【言語の興亡】東京：岩波書店. 2001年.)
- Duggan, H. N. & Th. Turville-Petre, eds. 1989. *The Wars of Alexander*. (EETS, s.s., 10.) London: Oxford Univ. Press.
- Fisher, John H. 1996. *The Emergence of Standard English*. Lexington, KY: The Univ. Press of Kentucky.
- Fisiak, Jacek & Peter Trudgill, eds. 2001. *East Anglian English*. Cambridge: D. S. Brewer.
- Friedman, A. B. & N. T. Harrington, eds. 1982. *Yvain and Gawain*. (EETS, o.s., 254.) London: Oxford Univ. Press.
- Gordon, E. V. & A. R. Taylor. 1957. *An Introduction to Old Norse*. 2nd and revised edition. Oxford: Clarendon Press.
- Hogg, Richard M. ed. 1992. *The Cambridge History of the English Language*. Vol.1. *The Beginnings to 1066*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Hogg, Richard M. 2002. *An Introduction to Old English*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- Hupe, H. 1893; rpt. 1962. *On the Filiation and the Text of the MSS. of the Middle English Poem Cursor Mundi*. As Part VII of *Cursor Mundi*, ed. by Richard Morris. (EETS, o.s., 101.) London: Oxford Univ. Press.

- Iyeiri, Yoko & Margaret Connolly, eds. 2002. *Essays on Medieval English*. Tokyo: Kaibunsha.
- Kastovsky, Dieter & Arthur Mettinger, eds. 2003. *Language Contact in the History of English*. 2nd & revised edition. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Kerkhof, Jelle. 1982. *Studies in the Language of Geoffrey Chaucer*. 2nd edition. Leiden: E. J. Brill.
- Knowles, Gerry. 1997. *A Cultural History of the English Language*. London: Arnold.
(=ノールズ, ジェリー, 小野茂・小野恭子訳, 『文化史に見た英語史』 東京: 開文社, 1999年.)
- Kurath, Hans et al, eds. 1956-2001. *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press.
- Laing, Margaret, ed. 1989. *Middle English Dialectology*. Aberdeen: Aberdeen Univ. Press.
- Lass, Roger. 1992. "(Middle English) Phonology and Morphology." In Blake, ed., 23-155.
- Lass, Roger. 1994. *Old English: A Historical Linguistic Companion*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 松瀬憲司. 1999. 「チョーサーの不定詞(Ⅲ) -名詞(句)+不定詞-」【熊本大学教育学部紀要】
人文科学編 48, 179-193.
- 松瀬憲司. 2000a. 「言語接触と言語変容-古英語・古ノルド語間の接触について-」
【熊本大学英語英文学】43, 41-55.
- 松瀬憲司. 2000b. 「R音転換再考」【熊本大学教育学部紀要】人文科学編 49, 237-252.
- 松瀬憲司. 2001. 「初期英語における文法上の新しい仕掛け-古ノルド語からの『贈り物』-」【熊本大学教育学部紀要】
人文科学編 50, 41-53.
- McIntosh, Angus. 1989a. "Present Indicative Plural Forms in the Later Middle English of the North Midlands." In Laing, ed., 116-122.
- McIntosh, Angus. 1989b. "The Textual Transmission of the Alliterative *Morte Arthure*." In Laing, ed., 179-187.
- Morris, R. ed. 1874; rpt. 1961. *Cursor Mundi*. (EETS, o.s., 57.) Part I. London: Oxford Univ. Press.
- Morris, R. ed. 1892; rpt. 1962. *Cursor Mundi*. (EETS, o.s., 99.) Part VI. *Preface, Notes, and Glossary*. London: Oxford Univ. Press.
- Mossé, Fernand. 1952. *A Handbook of Middle English*. Trans. by J. A. Walker. Baltimore: The Johns Hopkins Univ. Press.
- Mustanoja, Tauno F. 1960. *A Middle English Syntax*. Part I. Helsinki: Société Néophilologique.
- 中尾俊夫. 1972. 『英語学大系9: 英語史Ⅱ』 東京: 大修館.
- Perry, G. G. ed. 1886; rev. 1921. *English Prose Treatises of Richard Rolle de Hampole*. (EETS, o.s., 20.) London: Oxford Univ. Press.
- Richardson, F. E. ed. 1965. *Sir Eglamoure of Artois*. (EETS, o.s., 256.) London: Oxford Univ. Press.
- Ritt, Nicholaus. 2003. "The Spread of Scandinavian Third Person Plural Pronouns in English: Optimisation, Adaptation, Evolutionary Stability." In Kastovsky & Mettinger, eds., 279-304.
- Samuels, M. L. 1989. "The Great Scandinavian Belt." In Laing, ed., 106-115.
- Trudgill, Peter & J. K. Chambers, eds. 1991. *Dialects of English: Studies in Grammatical Variation*. London: Longman.
- Trudgill, Peter. 2001. "Third-person Singular Zero: African-American English, East Anglian Dialects and Spanish Persecution in the Low Countries." In Fisiak & Trudgill, eds., 179-186.
- Wolfram, Walt. 1991. "Towards a description of *a*-prefixing in Appalachian English." In Trudgill & Chambers, eds., 229-240.
- Wright, Laura. 2001. "Some Morphological Features of the Norfolk Guild Certificates of 1388/9: An Exercise in Variation." In Fisiak & Trudgill, eds., 79-162.